

前号の終わりに、「高句麗に関して最後に一つ書き加えたい」と書いたが、それは700年の栄華を誇った高句麗のその後が日本においてどのような形でつながって行ったかについてである。

前号で述べたように668年に、唐と新羅の連合軍により滅亡したわけであるが、一部の遺民は<sup>まつかつ</sup>靺鞨<sup>1)</sup>と組んで渤海(698年～926年)を建国した。もちろん捕虜として唐に連れ去られた人たちもかなりの数に上った。一方で日本に亡命した高句麗人も多数いた。日本では彼らのことを「高麗人(こまひと)」と呼んだ。国が滅亡した時だけでなく、それ以前から高句麗の人々は日本に渡り渡来人として各地で暮らしていた。彼らは大陸における高度な技術や文化を数多く伝え、日本の文化水準の向上に多大な貢献をしてきた。

716年、日本は奈良時代であったが時の律令政府は、関東一円に住んでいた高麗人1799人を集め武蔵国に「高麗郡<sup>こまぐん</sup>」を設置した。当初の高麗郡は現在の日高市と飯能市を中心に置かれている。そして初代郡司には高句麗の王族とされる「高麗王若光(“こまのこきしじゃっこう”と読む。以下“若光”とする)」が就任した。

その後鶴ヶ島市(全域)、川越市、入間市、狭山市の一部が高麗郡に加わった。しかし明治19年(1896年)に入間郡に編入され、惜しくも高麗郡の名は消え去った。それでも高麗村と高麗川村が存続していたが1955年に両村が合併してなぜか日高村になり、さらに1991年に日高市に移行して現在に至っている。

なぜ歴史ある“高麗”という地名を残さなかったのであろうか。なお、2016年は高麗郡を設置してちょうど1300年に当たるため日高市は、高麗人達の業績を永く後世に伝えるため「高麗郡建郡1300年記念事業」を行う。

今日1300年の長きに亘る歴史を偲ぶ縁でまず挙げられるのは、高麗神社であろう。私はこの神社

は知ってはいたが訪れたことがなかったので、昨年11月下旬に行ってみた。私は自宅から車で行ったのであるが、高麗神社は電車で行かれる方はJR八高線の高麗川駅が近い。

高麗神社の周囲は長閑な田園風景が広がり、往時を懐古するのに相応しいところである。近くを高麗川が流れている。この川は秩父に源を発し高麗神社の近くを南西から北東に流れ、それから坂戸市で越辺川に合流し、最終的に荒川に流れ下っている。

神社の入り口には「高麗神社」と彫りこまれている大きな石柱が立っている。側面には「朝鮮総督・陸軍大将 南次郎 書」と書かれていて政治がこの神社に深く関わっていたことが窺われる。朝鮮総督府は日韓併合の年、1910年の8月に設置され、南は第7代目の総督になった人である(在任期間1936年～1942年)。

参道に歩を進めると、まず目に入るのが左右一対の白色の柱で、その上部には人面が彫刻され、下部には「天下大將軍」と「地下女將軍」の文字が書かれている。この柱は、JR高麗川駅前と西武線高麗駅前にも置かれていた。気になるので何の意味を持つものなのか、ネットで調べてみた。要約すると次のように解説が載っていた。



將軍標(チャンスン)といい、朝鮮半島の農村部に見られる。村と村との境界線であり、村を守る守護神でもある。人面が怖い顔をしているのは悪い鬼を追い出して人々を守るためと言われている。日本における將軍標は高麗神社のものが有名である。



たまたま、'わんりい' 会員でもある松林浄蓉さん著の「枝散華」を田井さんからお借りした。その本の中で、著者の松林さんが、

『天下大將軍』『地下女將軍』と書かれた大きなト



高麗神社・参道に立つ將軍標(チャンスン)

一テムポールのような柱を目の前にすると異次元に来たような気持になります。二十年前に韓国旅行をした時に見た、農村の入り口などに立てられていた境界標だったことを思い出しました」

と書かれているが、都会ではなく農村でよく見られるのであろう。私は韓国には数回旅行したが、その時にはあまり興味を持たなかったからか將軍標は見た記憶がない。次回韓国旅行の機会があれば是非見てみたい。

さらに本殿に向けて歩いていくと、杉の木立が続く。その根元には日本と韓国の名の通った方々の記念植樹の立札が並んでいる。一つひとつ見ていると「出世明神の由来」と書いた説明板の前に来た。なぜ出世明神と言われるようになったのかは次のように書かれている。

〈高麗郡総鎮守として郡民の崇敬を受けてきた当社は、近代に入り水野鍊太郎氏、若槻礼次郎氏、浜口雄幸氏、斎藤実氏、鳩山一郎氏等の著名な政治家が参拝し、その後相次いで総理大臣になったことから、出世開運の神として信仰されるようになった。(以下略)〉

上記5名の中では水野鍊太郎氏は総理大臣にはなっていないが、朝鮮総督府・政務総監や内務大臣などを歴任している。また斎藤実氏は朝鮮総督のあと総理大臣になっている。その他の人は直接には朝鮮に関係のある役職にはついていない。その3人はなぜ高麗神社に参拝したのかわからない。しかし政治的には重要な神社であったことは間違



高麗神社の本殿



本殿に掲げられた扁額に小さく“句”の文字がある

いなかろう。

まもなく本殿が見えてきた。本殿の手前にある門の上部に扁額が掛かっている。これが少し変わっているのである。高麗神社と大きな字で書かれているのであるが、高と麗の字の間に小さな「句」の字が書き入れてある。

さっそく社務所で聞いてみると、「実は明治33年(1900年)に、高麗および李氏朝鮮時代の特権階級貴族であった両班ヤンバンの子孫である趙重應という方がこの神社を参拝しました。その時この方に高麗神社と書いてもらうよう依頼したところこのように書かれました」ということであった。句の字を入れることにより高句麗という国を偲ばれたのだろうか。

本殿の前で二礼二拍一礼をした後、若光の菩提を弔ってある聖天院という寺院に向かった。聖天院には高麗神社から5分も歩けば門前に到着する。

そこにはやはり一对の將軍標が立っている。高麗神社のそれとはデザインが異なっている。

境内に入るとなかなか立派な寺院で、庭園などの手入れも行き届いている。聖天院は751年に創建され、若光の守護仏・聖天尊を本尊とした真言宗の寺院である。入り口である雷門のそばに「高麗王廟」と書かれた祠がある。この中に若光の墓がある。高さ2メートル余りの石塔で砂岩を5個積み上げた墓が鎮座していた。千年以上の時の流れを感じさせる墓である。異国の地で葬られた若光の魂は何を思っているであろうか。境内を歩いていると慰霊塔が見えてきた。前が広場になっていて周囲に何体かの石像がある。一つひとつ見ているとなんと私の好きな広開土大王があった。鎧を纏った私のイメージに近い石像で満足した。

さて、1300年の歴史を偲ぶ縁で、もう一つ挙げなければならないところがある。それは神奈川県の大磯である。

実は若光は716年に武蔵国・高麗郡の郡司として行く前にはこの大磯に居住していたのだ。彼は666年に日本に派遣され、大磯に上陸した。高句麗が唐・新羅の連合軍から激しく攻められていた時で、日本に援軍を求める使命を帯びて来たようだ。ところが来日2年後に祖国は滅び、日本に留まるしかなくなった。そして716年律令政府が武蔵国に高麗郡をつくることを決めた時、高麗人を取りまとめる郡司に人望の厚かった若光に白羽の矢が立ったわけである。

この大磯周辺には高句麗になじみの深い場所がいくつかある。まず大磯町には住居表示が高麗という場所が残っている。そして近くに標高167メートルの高麗山こまやまがある。高句麗からの渡来人が居住し集落をつくったことから高麗山の名がついたと言われている。この山の麓には高来神社があるが、もとは高麗神社と呼ばれていた。明治30年に改称されたという。

その高来神社に1月24日に行ってきた。行く前に大磯に住む友人に電話したところ、「タカク神社？」と言って一瞬考えた後、「高麗神社のことだ



高麗山を背にした、大磯の高来神社  
(地元の人は、高麗神社と呼んでいる)

ろ。地元の人が高麗神社と言ってるからタカク神社ではピンと来ないんだ」と言うのである。

どんな立派な神社だろうと期待して行ったのであるが、着いてみると思ったより小さな神社で人気はなく、日高市の高麗神社を見たせいか随分質素な佇まいである。將軍標(チャンスン)も立っておらず、説明板がなければ高句麗と関係ある神社とは思われない。神社のすぐ裏手からは高麗山への登山道がある。男坂を登りきると頂上は開けていてそこにはその昔、社殿があったとのことだが今は礎石が点々と申し訳程度にあるだけである。若光さんの魂はあの世で嘆いているのではなかろうか。

関西には百済とゆかりのある地が多いし、越前から能登にかけての港は渤海の使節の交流拠点であった。いずれにしても九州は言うに及ばず、日本各地に朝鮮半島や大陸とのつながりがある。現在の日中韓の膠着した状況を見るとき、このような歴史を顧みることは大切なことではなかろうか。

高句麗についてかなり長く書いたが、このあた

り「通化市」の話に戻ろう。

2009年3月20日は集安市内の「豪江大酒店」というホテルに泊まった。友人が通化市はワインが有名だと言うので夕食時にワインを注文した。ワインの良し悪しを言うほどの知識は私にはないが、酒の好きな友人がおいしいと言うので、いいワインに違いない。バスから見る沿道にはブドウ畑は確認できなかったがどこかで栽培しているのであろう。街の北側に近代的なワインの醸造所があるらしい。満州国時代(1932年建国)から人気であったそうだから、さすれば一世紀くらいの歴史があることになる。通化市はまた後述するように朝鮮人参の産地としても有名である(集安は通化市の一部で、**県級市<sup>2)</sup>**であるが、当稿では別の都市として扱った)。

我々は、3月21日の朝、集安のバスターミナルから通化市中心部に向けて出発した。約2時間バスに揺られて、ようやく市内を分断するように流れている**フンジャン**という大河のそばに着いた。

このあたりで通化市がどのような街なのか概観してみよう。

通化市は吉林省の西南部に位置する地級市であり、少し古い統計資料で恐縮であるが2004年は226万人と日本では大都市に相当するくらいの人がある。通化師範学院という日本語学部もある大学がある。本来であれば明るい話題や名所旧跡(集

安市は既述の通りだが)を案内したいところであるが、私の知る限りそのようなものはあまりない。

この都市は旧満州国との関わりや戦争に関する事柄が多く、通化市の人には申し訳ないが良いイメージの都市とは言い難い。旧満州国時代には通化省の省都でもあったのである。そして後述するように約一週間と極めて短時間ではあったが、満州国の最後の首都となった。関東軍司令部も置かれたのだ。通化事件(1946年2月3日発生 = 1945年に戦争が終わってからこの街で痛ましい事件が起こった)も発生した。

19世紀末から20世紀前半は、戦争を抜きに語れないが、事実として我々が知っておくべきことは多い。

(つづく)

#### 〈注記〉

- 1) **靺鞨**<sup>まっかつ</sup>：中国の隋唐時代に中国東北部(現在のロシア連邦・沿海地方)に存在したツングース系農耕漁労民族。  
(ウィキペディア抜粋)
- 2) **県級市**：中国の都市の位置付けは、格上から、①省級市(省都)、当然各省に一つだけあります。吉林省で言えば長春市、②地級市、次に大きい市で吉林省では通化市、吉林市などです。地級市は大きな都市なので一つの省にはあまりありません。③**県級市**、地級市より小さな市で比較的たくさんあります。以上3通りあります。その下には鎮などの町や村があります。